

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第38回

戦後80年、 アウシュヴィッツ再訪



イラスト・題字：長峯亜里

第二次世界大戦終結から80年

英国にいと、連日のように目に入ってくるのが戦争の現状を伝える報道だ。夕方テレビを付けると、ロシアによる侵攻で始まったウクライナ戦争やガザ紛争で破壊された建物のがれき、負傷者、そして食料不足に苦しむ人々の映像が次々と現れる。「これで死者は××人になりました」というアナウンスを聞くことも日常の一部となった。世界中で多くの人の命が犠牲になった第二次世界大戦終結から今年で80年になるが、各地での戦争・紛争は継続中だ。

欧州で大戦といえば想起されるのが、ナチス・ドイツによるユダヤ人約600万人の大量虐殺・迫害行為＝ホロコースト。1940年、ポーランド南部に建設されたアウシュヴィッツ強制収容所は、ホロコーストの中心的役割を担った大規模な施設である。約110万人がガス室などで虐殺され、このうちおよそ100万人がユダヤ人。今年1月27日は、この収容所が旧ソビエト軍によって解放されて80年目だ。

解放から80年にちなみ、日英間の交流促進を目的とする慈善組織「大和日英基金」は4月23日、ポーランドの国立アウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館で、日本人唯一の公認ガイド中谷剛氏を招きウェビナーを開催した。同氏はホ

ロコーストの歴史的
背景、現代社会との
つながり、記憶の継
承をどうするかにつ
いて話してくれた。

筆者がアウシュ



日本人唯一の公式ガイド中谷 剛氏
(本人提供)

ヴィッツ強制収容所を初めて訪れたのは、20年以上前だ。筆者の夫と、ポーランド人ガイドの方との3人で広い施設内を回った。収容所に送られてきたユダヤ人たちの靴やヘアブラシの山、ガス室の様子を見て、大きな衝撃を受けた。アウシュヴィッツからクラクフに戻るタクシーの中で、隣に座った家人と互いに一言も言葉を交わさなかった。どんな言葉でも形容できないようなものを見てしまったように思ったのである。

多様性とは逆のベクトル

今年5月、あるメディア会議がクラクフで開催されることになり、今回は中谷氏による日本語でのアウシュヴィッツ・ツアーに参加させてもらうことにした。

クラクフから電車に乗り、アウシュヴィッツ博物館入場棟の前までたどり着くと、集合時間を若干過ぎて到着した当方を中谷氏と参加者8人が待っていてくれた。参加者のほとんどが20代から30代前半のようだった。ユダヤ教の男